

産業政策の制度理論」「9. 産業のイノベーションと知識の創造と普及：産学連携の省察」「10. ヘルスケアの知識パラダイムの変化：アメリカにおける進歩的経験の意義」「11. 20世紀フランスにおける情報、コンピュータ化、医療行為」「12. ヨーロッパにおける高等教育研究」「13. 教育セクターにおける知識の生産と活用：事例と考察」「14. 専門的知識にみる知識の生産、普及、活用：教師と医師の比較分析」「15. 知識基盤を特徴づける指標：利用可能な指標と欠落している指標」)

各章の概要をシンプルにまとめれば、1章では知識についての概念整理（公的・私的、ノウファット・ノウファイ・ノウハウ・ノウフウ、明白・暗黙的）、経済学的視点からの知識の生産、普及、活用についての先行研究の紹介、学習経済の中での教育の役割の変化について触れられている。2章では教育・医療・工学セクターにおける知識の実態やそれらの比較、またICTの影響などについてまとめられている。3章では、教育セクターへのナレッジ・マネジメントのあり方についての提言がなされている。4章では、新たな研究テーマとして、「知識と学習のマネジメント」「知識や学習の新たな測定に向けて」「教育におけるイノベーション政策」「教育における研究開発システムに向けた新たな取り組み」「学習科学のための新しい研究テーマに向けて」の5つが取り上げられている。

第2部では、OECDのCERIが開催した4つのセミナーでなされた報告が取りまとめられており、5章では、6章以降で示される「選りすぐり」の論点を取りまとめられている。具体的に6章では、ノウハウ・テクノロジー知識の本質とこれらの進展について述べられ、7章では、学習経済の分析枠組みを示し、暗黙知の重要性や知識創造の2つの発展モデル（西洋と東洋）などについて説明した上で、学習経済において労働市場の社会的二極化が生じるため、薄弱な学習者の学習能力向上に向けた「新たなニューディール政策」の必要性が説かれている。8章では、先端技術産業の創造、普及、応用プロセスにおける大学やサイエンスパークの役割として、前者は教育サービスの提供者として関与してきたこと、そして今後は新技術の提供者として関与することになるであろうことが述べられた。また、後者については商業的なインセンティブの構築によりフォーカスを置くべきことが指摘されている。9章では、大学における技術移転や産業におけるイノベーションについて言及した後、大学と産業界のつながりの拡大の一方で、イノベーションを生み出す学習活動に対する関与は十分に格出されてきていない

OECD 教育研究革新センター編著
立田慶裕監訳

『知識の創造・普及・活用：学習社会のナレッジ・マネジメント』

(明石書店、2012年、505頁)

島 一則 (広島大学)

本書はOECD教育研究革新センターによる知識基盤社会・学習社会におけるナレッジ・マネジメントを教育セクターでどのように行うべきかを考えるために、その概念枠組みと様々な領域における知識の創造・普及・活用の実態を明らかにしようとしたものである。その構成は2部構成、15章にわたる大著である。具体的にその章タイトルを紹介すれば、次のようになっている。

第1部 学習社会のナレッジ・マネジメント（「1. 学習経済における教育の役割を理解する」「2. 各セクターにおける知識の生産、普及、活用」「3. 教育セクターへの教訓：学習システムの創造」「4. 新たな研究テーマ」）、第2部 知識の創造・普及・活用の事例（「5. ナレッジ・マネジメントに関する専門家の見解」「6. 知識とイノベーションのシステム」「7. 学習経済：医療システムと教育システムの知識ベースのためのいくつかの示唆」「8. 経済発展における産業政策、能力ブロック、科学の役割：

ことが述べられている。10章では、アメリカにおけるヘルスケア領域における知識のあり方の変化が明らかにされ、「ヘルスケアの知識に関係した患者」「医療サービスの供給者」「現場の実務医」「費用の支払者」「医療サービス購入者」「製薬企業」や「教授（大学）」の間における新しいタイプの知識の創造に、医療改革の民営化、消費者運動、新しい情報技術の導入、企業活動が大きな影響を持つであろうことが述べられている。11章では、フランスの医療分野におけるコンピューター化のインパクトと可能性についての説明がなされた上で、理想状態と現実の乖離について説明がなされている。12章では、ヨーロッパにおける高等教育研究の状況や政策との関係について触れられており、必ずしも高等教育研究が政策をリードするといった形にはなり得ていないことが述べられている。13章では、教育経済学研究における投資効果率（収益率と訳すべきではないだろうか）、教育の生産機能（生産関数と訳すべきではないだろうか）、「私立学校」と「公立学校」の教育効果についての比較を事例として、これらの研究が政策とどのような関係にあるのかが述べられている。そして具体的には「教育における学術的な研究が「常識」と一致しているときのみ、そしてそれが特定の時間と場所において「政治的に適切である」ときのみ、政策意識に浸透するという特徴を持つ」としている。14章では、イギリスにおける教師と医師における専門的知識の生産、普及、活用状況についての比較がなされ、教育分野におけるモード2への移行が最先端の教育を生み出すであろうことが述べられている。最後の15章では、多様なセクターでの知識基盤の変容に光を当て、知識基盤の論理的側面を把握したうえで、知識基盤の変容を理解するための一連の尺度の開発がなされている。

さて、読者におかれては本書は、総合として何を言いたいのだ？との疑念を持たれる方もおられるのではないだろうか。もちろん、そのうちの少なからぬ部分は、評者の研究理解能力・文献紹介能力の問題によるものであることは疑いない。だが、読後の評者の感想もまさにこのことであつた。監訳者はしがきを読んでも、序文を読んでも、さらには監訳者あとがきを読んでも、本書の全体像やパーツの具体像が極めて捉えづらかつたし、一読後も大著ということもあるが、個別論文の個々の指摘は別にして、全体として何が述べられているのかがやはりつかみづらい。こうした中で繰り返し、読み進めた結果、評者の行きついた答えは、本書の設計そのものかなりの困難性がビルトインされているのだということであ

る。すなわち、『知識の創造・普及・活用：学習社会のナレッジ・マネジメント』というタイトルに表れているように、極めて知的に刺激的な試みである、と同時にこうした内容についての固有の『学問』がしっかり構築され、知識としても定着してきているという段階にある訳ではなく、むしろ様々な学問分野における標記のテーマに関わる論文を集め、モード2的に問題解決に取り組み始めた段階についての報告になっているからであろう。

そうであるとするなら、本書の読み方として重要になるのは、第2部以降、しかも特に8章以降14章までの様々な分野の研究者がそれぞれの専門分野を事例としながら、知識の創造、普及、活用について話したものを読んだ後で、遡及的にそれらを整理したもの、さらにはそこから導き出される理論的側面や今後の課題について読み進めることが必要となろう。ただ、そうであつたとしても、監訳者自身が「難解な内容である上に十分洗練された訳とは言えないかも知れない」と述べているような側面が残らない訳ではないが、同時に監訳者が述べている「本書が教育と学習のナレッジ・マネジメントについて考え、学ぶための基礎的文獻として少しでも役に立つことができることを期待したい」という趣旨には十分に沿うものである。